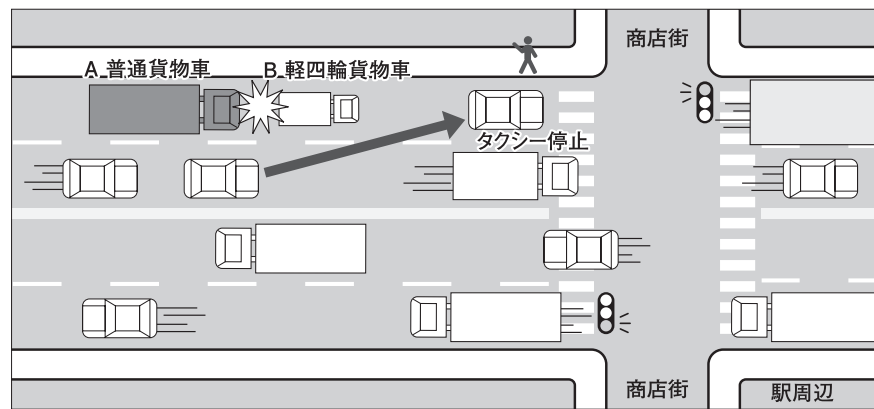


# 職場における交通安全指導

## 低速で走行中、漫然運転により追突



### ■事故の概要

- 発生日時  
日 時：平成22年6月某日 午後7時頃  
天 候：曇り
- 道路状況  
片側2車線の市街地道路
- 事故の当事者  
運転者A（普通貨物車）：65歳、男性  
被害者B（軽四輪貨物車）：62歳、男性
- 被害状況  
A：前部バンパー微損  
B：頸椎捻挫（全治3週間）

### 事故状況

Aは運送業での乗務歴が30年になるベテラン運転者で、主に大型貨物車に乗車し長距離運転を行っていたが、2件の追突事故を起こしたのを機に普通貨物車に乗り換えスーパー等へ食品雑貨類を配送する業務に従事していた。

当日Aは、早朝に会社を出発し、全ての配送業務を終え、帰社するため交通頻繁な片側2車線道路の第1通行帯を街の中心部へ向かっていた。

人通りの多い駅周辺に近づいた頃には通行車両も増え徐々に車両間隔も詰まり、低速で連続走行をしている状態であった。

商店が軒を連ねる交差点に差し掛かった際、前方の第2通行帯を走行していたタクシーが歩道上で手を挙げた客を見付け、急にBが運転する軽四輪貨物車の前へ進路変更をした。

Bの後方を走行していたAは、タクシーが進路変更する状況は認めたものの、歩道上の人には気づいておらず、単なる進路変更でそのまま直進すると思っていた。ところがタクシーは進路変更の直後更に路肩に車を寄せ、客を乗せるために交差点の直前で停止したため、タクシーに追従していたBが危険を感じ急停止した。

その時、Aは視線を高くしやや遠方を見ながら走行していたため、直前のBの停止に即応できず追突し、Bに傷害を負わせた。

この事故の原因は、Aがタクシーが客を乗せるために進路変更したものをそのまま進行すると勘違いし、遠方へ視線を向けたまま走行していたため前車の動静を把握できず、停止車両の発見が遅れたことにある。

一方、タクシーも後続車の急停止を誘引した運転は危険な行動であった。

## 安全指導

### ① 体調管理に配慮

事故時65歳だったAは、加齢に伴い次第に疲労感も募り、また、視力の低下を感じていました。

大型貨物車乗車時に2件の追突事故を起こしましたが、いずれの事故も、疲労から漫然運転に陥り前方注視を怠ったことが事故の原因でした。

当日は多忙な業務スケジュールであったため早朝からフル稼働で荷作業に当たりましたが、ここ

数日体調が優れなかったこともあり、全ての配送業務を終えた時は安堵感も加わり心身の疲労度は高まっていました。

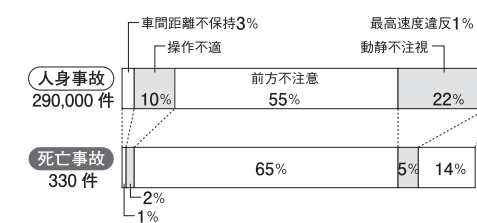
帰路の途中では仕事の緊張感も解け暫くの間低速走行が続いていたため、事故発生の交差点に近づいた時には運転が単調になり、注意力や思考力も鈍って漫然と走行している状態でした。

そのためタクシーが進路変更した際、単なる進路変更と勘違いし状況判断を誤ってしまい、また、直前の車両の動静や歩道上の人の動きを捉えることができませんでした。

体調が優れない状態で、しかも業務負担が普段より多かったことから、心身の疲労が増し注意力が散漫になったことが事故の要因として挙げられます。

ある専門機関が行った高齢者向けの意識調査によると、「若者には負けない。」という意識が強いという調査結果もありますが、加齢に伴って徐々に運動能力や判断能力が低下し、安全運転に必要な認知・判断・操作にミスが生じ易くなるのも事実です。平素から体調管理に十分配慮し、心身の状態を良好に保つように心掛けましょう。

●前方不注意など認知ミスによる事故がほとんど…  
■第一当事者の違反種別発生状況



### ② 危険を予測した運転

交差点やその付近を通行する際は、交通事故に結び付く様々な危険要因が存在することから、運転者は最大限の注意を払い慎重な運転を心掛けることが大切です。

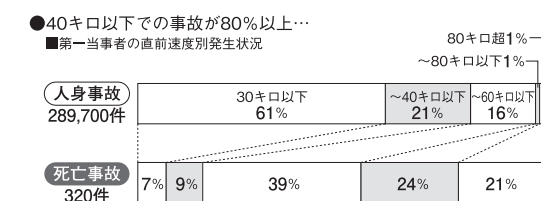
Aは低速で単調な運転を繰り返すうちに警戒心が薄れてしまい、タクシーの急な進路変更を目前で認知しながら、その動向に十分な注意を払わず漫然と走行してしまいました。その結果、Bの車両が急停止したのに即応できず追突しました。

この事故のように認知しながら危険と意識しなかったり、また、危険に対して誤った判断をすることがよくあります。

トラックには様々な特性があり、特に運転席が高いという点から目の前が盲点となり、小型車を見落として追突するケースも少なくありません。漫然と運転していて危険を予測できなかった場合

と、予め危険を予測し行動した場合とでは、反応時間に0.5秒の差が出るといわれています。運転する際は警戒心を旺盛にして、一歩先を読み次の手を打つ注意深さが肝要です。免許を取って間もない時のように謙虚な気持ちで、「ひょっとすると…かもしれない」という危険意識を持つことを忘れてはなりません。

トラックには「死角」が多いことを常に念頭において、予め危険をチェックし、余裕を持って危険回避できるよう、「危険を予測した運転」を行いましょう。



### ③ 気の緩みに注意

昨年度、当組合における人身事故の発生は460件で、その内交差点やその付近の事故が216件(47%)、追突事故が218件(47.4%)を占めています。とりわけ追突事故では停止車両への追突が207件(95%)と大部分を占めています。

これらの事故は、気の緩みから油断が生じ、前方注視を怠ったことが原因で発生しているといっても過言ではありません。

当時Aは、会社まで間近な距離に迫っていました。仕事の緊張感が解けホッとした心理状態の中で単調な運転が続いていたことから気持ちが緩んでしまい、注意力も鈍っていました。

事故は運転開始から30分、終了前の30分の間が最も発生する危険が高いといわれており、特に運転終了間際には安堵感から気が緩みがちになり、事故につながるケースが多く見られます。

この事故でも明らかのように、“スピードが緩めば気も緩む”ものです。

運転は、常に事故と隣り合わせであることを肝に銘じ、刻々と変化する交通状況の中で、気持ちを引き締めて運転しましょう。

●停止車への追突がほとんど…

